

スドクの方々との交流を通して、彼らから様々なノウハウを学びました。時には、彼らが私に対して「こういう化合物が生成物としてできているとしたら、NMRのピークはどんな感じで出ると思う？」などといった質問をされることもあり、私をお客さんとしてではなく、研究室の一員として接してもらえたことが嬉しかったです。また、私からも新入生に対して機器の使い方を教えてあげることで、少しはギブアンドテイクの関係になれたのかなと思います。他には、滞在先の研究室はCCHF (Center for Selective C-H Functionalization) というC-H結合の選択的官能基化に向けた共同研究ネットワークに参入しており、週に一度、いくつかの研究室とビデオ会議を通してディスカッションを行っていました。新しいことを始めるには、このように分野の異なる専門家の意見が聞ける機

会を積極的に設けることが研究の発展には重要だと感じました。また、二か月に一回程度、月末に化学科全体での懇親会のようなものがあり、他の研究室と交流を深められる場合は、私たちのところで言うハッピーアワーに近いものを感じました。

アメリカでの3か月間はあっというまでしたが、辛かったことも、楽しかったことも、全部含めて私にとって貴重な経験となりました。総研大のコース別教育プログラムは少数精鋭な環境であるからこそできる他大学院にはないカリキュラムだと思います。留学する機会は社会人になってしまうとなかなか得られないものだと思いますので、時間に比較的余裕のある学生のうちに積極的に挑戦することをお勧めします。日本の研究レベルは世界的に見ても非常に高いとは思いますが、国外に出て世界トップレベルの研究環境を肌で感

じることは大いに刺激になると思います。最後に、今回の短期留学で大変お世話になりましたDavies教授を始めDavies研究室の皆様、大学院係や総研大基盤総括係の皆様、正岡先生、そして私の家族にこの場を借りて厚く御礼申し上げます。

## 受賞者の声

### 榎本 孝文 (物理科学研究科 構造分子科学専攻 5年一貫性博士課程3年) 平成27年度日本化学会東海支部長賞

平成27年度の総合研究大学院大学 修士同等論文審査発表会にて「Near-infrared Light Induced Electron Transfer Reaction Using Highly Photostable Distorted Phthalocyanine (歪んだフタロシアニン化合物を用いた近赤外光誘起電子移動反応)」というタイトルで発表を行いました。その結果、本発表成果を平成27年度日本化学会東海支部長賞として推薦頂き、本賞を頂くことになりました。本賞は化学を学ぶ大学院生等の勉学奨励の一助として、修士(相当)過程の修了時に成績優秀な学生を顕彰するものです。発表会では、ご出

席なされた先生方から活発な議論をいただき、非常に有意義な時間を過ごさせていただきました。

今回の受賞の対象となった研究は、可視光よりもエネルギーの低い近赤外光を駆動力として、光誘起電子移動反応(光のエネルギーを電気化学的なポテンシャルへと変換する反応)を達成したというものです。近赤外光は地上まで届く太陽光エネルギーの40%以上を占めることから、人工光合成をはじめとする光-化学エネルギー変換の重要なターゲットの一つでした。今後は近赤外光で創り出した電気化学的なポテンシャルを利用し、貯蔵可能な化学



授賞式にて 大峯前所長と 右が筆者

エネルギーにまで変換することを目指し、研究を更に進めていきたいと考えております。

今回、このような栄誉ある賞をいただき、大変嬉しく思っております。本研究を実施するにあたり、多くのご支援とご指導を賜りました正岡重行准教授、近藤美欧助教をはじめとする研究室の皆様へ深く感謝いたします。